

立教大学

[RIKKYO UNIVERSITY]

文理の知をつなげ 未来を拓く 「環境リーダー」を 育てる新学部



環境学部(設置構想中)が開設される立教大学池袋キャンパス

気候変動、生物多様性の損失など環境に関する問題が社会的課題としてクローズアップされ、環境人材へのニーズが高まるなか、立教大学が2026年4月に環境学部を開設する(設置構想中)。「環境リーダーの育成」を掲げ、文理の枠を超えたリベラルアーツ教育や現場で学ぶフィールド教育を重視する同学部の構想について、開設準備に携わる2人の教授に話を聞いた。

取材・文／伊藤敬太郎

社会の重要課題である 「環境」にフォーカス

東京都・豊島区に本キャンパスを置く立教大学は、現在11学部1コースを擁する総合大学。この学部構成に、2026年4月、新たに「環境学部」(設置構想中)が加わる(図1)。

気候変動、生物多様性の損失、ゴミ

や化学物質による汚染といった環境問題の解決は、今や全世界レベルで喫緊の課題。行政、企業、地域などあらゆるセクターで幅広い取組が求められており、その中核を担う人材へのニーズも高まってきている。

立教大学環境学部が育成を目指すのは、まさにその役割を担う「環境リーダー」だ。そのために必要とされる力を、同学部は次の4つにまとめている。「文理の枠を超えた多様な視点・幅広い知識+現実の課題とつなぐ理解力」「環境正義」の理解と持続可能な社会への変革を担う行動力」「自然環境の科学的理解+社会経済に関わる技術と学識」「さまざまな人をつなぐ対話・協働の関係構築力」。

これらの力を養うために、同学部は自然科学・社会科学・人文科学が融合した多角的な視点を磨く「リベラルアーツ教育」、立教大学の強みである「リーダーシップ教育」、環境問題の現場で体験的に学ぶ「フィールド教育」の3つを教育の大きな柱としている(次ページ図2)。

それでは、環境学部の特色・魅力について、新学部就任予定の2人の教授に詳しく聞いていこう。

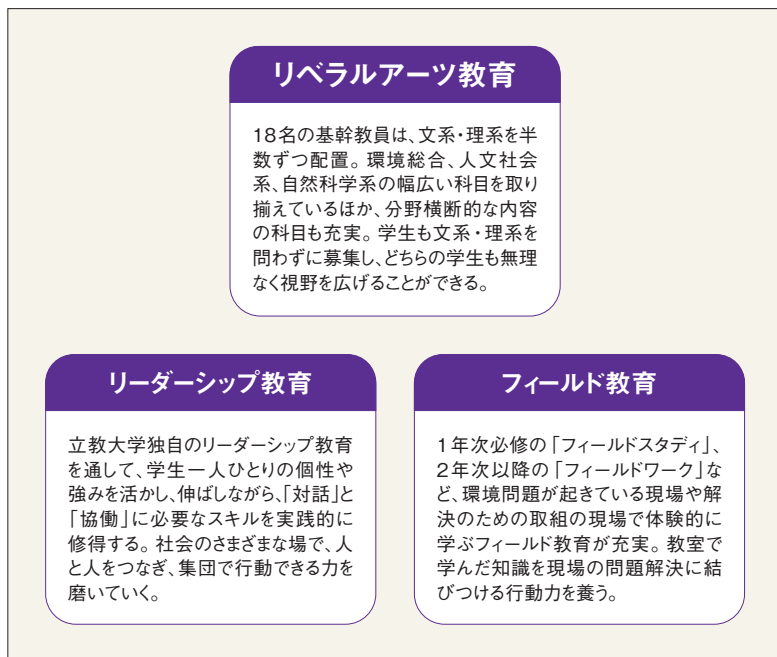
人とのつながりをつくり 組織で行動できる力を養う

「環境教育・ESDとシティズンシップ」、
「社会変革の環境教育・ESD論」などの科目を担当する二ノ宮リム さち教授は、まさに環境教育、ESD(持続可能な開発のための教育)が専門領域。

「環境問題を解決するためには、環境についてだけ学べばいいわけではありません。社会のなかで複雑に絡み合ったさまざまな問題を多角的な視点で見つめ、環境問題の背景にある、ものごとの関係性をとらえていく必要があります。そのうえで、持続可能な社会をつくるという大きな目標に向けて、一人の市民として、取組に参画していく力も必要です。人々が、こうしたものの見方や、市民の力としてのシティズンシップを育むためには、どのような教育・学習が必要なのかを考える研究に取り組んでいます」

図1 立教大学の学部構成

文学部
異文化コミュニケーション学部
経済学部
経営学部
理学部
環境学部(2026年4月設置構想中)
社会学部
法学部
観光学部
コミュニティ福祉学部
現代心理学部
スポーツウエルネス学部
Global Liberal Arts Program(GLAP)



二ノ宮教授の研究テーマは、環境学部の教育理念にも密接に通底している。

「環境に関する知識や環境問題に対する感性・価値観を養うことももちろん大切です。それに加えて、社会を変えていくためには、仲間をつくり共に行動することや、価値観や立場の異なる人とも協働することが不可欠です。環境学部は、対話を通して環境について考え、共にアクションを起こすネットワークのハブのような場にしていきたい。そして卒業後は社会のさまざまな場で協働とネットワークをつくり出せる環境リーダーを育てていきたいですね」

ポイントの一つが、同学部が掲げる「環境正義」というキーワードだ。国際社会でも注目されており、日本の環境基本計画でも触れられているこの概念は、環境問題が本質的に抱える不公平・不公

正を正していくことを目標とする。

「例えば、温室効果ガスを多く排出しているのは裕福な人たちである一方、その結果もたらされる気候変動によって最も被害を受けるのは、住環境に恵まれず移動の自由もない貧しい人たちですよ。世代間の不公平もあります。今までの世代が排出してきた温室効果ガスが、この先の世代の人々の生活に影響を与えることになります。このような不公平・不公正を見据えて、環境問題と公正な社会づくりにあわせて取り組もうというのが環境正義という考え方です」

環境問題の現場に入って 体験的・主体的に学ぶ

そして、このような理念を行動に移す力を養うのがフィールドでの学びだ。1年次の必修である「フィールドスタディ」は国内の環境問題の現場を訪れ、その実態を実際に見て理解する科目。2年次以降の選択科目である「フィールドワーク」は国内外の環境問題の現場で実際に活動に参加する。大学が用意したプログラムのほか、学生が自分で主体的に見つけた現場での活動も、申請することで単位認定する予定だ。そのほか、

実際の仕事を体験する「ワークエクスぺリエンス」、自分たちでテーマを設定し、半年かけて環境課題の解決に取り組む「プロジェクト実習」など、現場で学ぶ機会には豊富にある。

「環境問題は現場で起きていて、教室の中で考えているだけでは解決できません。学んだことが問題解決にどうつながるかを理解するためにも、現場を知ることが不可欠です。また、さまざまな立場の人と対話し、協働し、社会を変革していくことが環境問題に関しては絶対に必要です。現場の実情と経験から学び、さまざまな人となりが行動する力を養うために、フィールドでの学びは非常に大切になると考えています」

リベラルアーツ教育によって 文理横断的な視点を養う

「環境科学入門1・2」「環境アセスメントと持続可能な開発」などの科目を担当する小林潤司教授は、有機化学とその応用としての環境分析が専門。小林教授は、現在の環境をめぐる言説に自然科学的な専門知識が伴っていないことを問題提起する。

「例えば、バイオマスプラスチックを導入するとCO₂排出量が削減されるという主張について、環境の専門家といわれる人たちでもその理由を科学的に説明できないことがよくあります。このように自然科学的な知識を置き去りにした主張に基づいて行動をした結果、みんながよかれと思ってやっていることが実はあまり効果がなかったり、むしろ逆効果だったりするケースがあるんです。この点は教育で解決すべき問題ですね」

このような小林教授の問題意識は、環境学部の文理の枠を超えたリベラルアーツ教育にも通じている。

「社会科学系を主に勉強していきたいという学生は、将来的には環境問題に対する具体的なアクションを考えていく役割を担うことが多いだろうと思いますが、そこには主張を裏付けるきちんとした自然科学系の知識が必要です。一方、理系の学生は、社会が抱える課題



二ノ宮リム さち 教授



小林潤司教授

を無視しては研究を進められないので、社会や人を理解するために人文社会系の知識が必要です。ですから、環境学部では文理両輪の知識を身につけられる教育に徹底して取り組んでいます。文理のバランスはそれぞれどのような専門性を身につけたいかによって、50:50でも90:10でも10:90でも構いません。そこは自分で決めていけるよう、テラーメードで科目選択ができるカリキュラムを設計しています」

こうした考え方にに基づき、各科目の授業内容も工夫されている。例えば、入学時点では文系・理系のどちらかに知識が偏っている学生でも無理なく環境学について学べるよう、1年次の必修科目に文理融合型の「リベラルアーツとしての環境学原論」を配置。これに続く、環境問題のトピックを取り上げ、総合的に学ぶ科目では、文理や専門の異なる3、4人の教員がそれぞれの視点からチーム

ティーチングで講義し、学生同士がそれに基づいてディスカッションするという内容で、学生は具体的な問題への興味関心を足場にして足りない知識を学んでいくことができる。また、その他の科目においても、それぞれに学んできた知識が異なる多様な学生が共に学ぶ授業形式そのものが文理融合的な視点の醸成につながる側面も大きいという。

学んできた科目も習熟度も異なる学生同士が共に学ぶ

「本学部は必修科目が少ないので、多くの授業で、文理の知識バランスが90:10の学生もいれば10:90の学生もいるという環境になります。また履修する学年を限定していない科目も多数あるため、同じ授業を受ける学生の学年がバラバラということも多い。履修してきた科目も習熟度も異なる学生同士が対話をしながら学ぶことで、多様な視点を磨き、専門が異なる相手、意見の異なる相手を理解して合意形成を図る力を養うことができます。大切なのは、相手の話を“立体的に”聞くことです。相手の発言の背景事情を、どのような経緯でそうなったのかという時間軸をもって理解しようとするのがポイント。一つひとつの授業がそ

のトレーニングになるのです」

例えば、小林教授が担当する「環境アセスメントと持続可能な開発」では、学生を地域住民役、行政役、開発企業役、環境保護団体役にグループ分けし、合意形成を図るロールプレイにも取り組む。

両教授に解説してもらったカリキュラムの全体像は図3の通り。基礎から専門に至る環境関連の知識の積み上げやリーダーシップ教育と同時並行で、文理横断的な学び、フィールドでの学びが積み重ねられていく。こうした学びを経た卒業後は環境省などの官公庁や地方自治体、NPO・NGO、企業、学校教員など多様な現場で環境リーダーとして活躍することが期待されている。

入試制度においては一般入試・大学入学共通テスト利用入試で、文系・理系どちらの生徒も受験できるよう試験科目を検討中。また、高校の「総合的な探究の時間」で環境問題に関わるテーマに取り組んで来た学生などを対象とした自由選抜入試（総合型選抜）も実施する計画だという。

環境問題の解決に関心がある高校生にも、環境をテーマに社会で変革を起こせる“柔らかな”リーダーシップを養いたい高校生にも、注目の新学部だ。

図3 環境学部のカリキュラム全体像

